

本気のいじめ対応

第1回

切り札はこれだ!

まずは「自分は正しい」を
いったん手放す



北海道公立中学校教諭
千葉 孝司

ちば こうじ いじめ、不登校対応がライフワークです。カナダ発のいじめ防止運動「ピンクシャッター」の普及にも努めてきました。著書『マンガで解説 いじめと戦う! プロの対応術』ほか。

【事例】保護者が加害児童をかばう

小学校六年生の担任です。学級内のいじめトラブルで悩んでいます。男子児童AのBに対するからかいが気になっていました。あるときその場に居合わせたので、少し声を荒げて「いい加減にしろ」と怒鳴りつけました。するとAの母親から、威圧的な指導に対してのクレームが来しました。いじめの事実を伝えても、「それはいじめではない」と聞く耳をもたず、わが子をかばうばかりです。AのBに対するからか

いも継続しています。どう対応したらよいのでしょうか。

*複数の事例を組み合わせた架空事例です。

状況を分析しよう

クラスのいじめをなくしたいというのは、担任の切なる願いですね。このケースでは、Aの非を保護者にも認めてもらって、協力して指導していくのが担任の理想です。ところが現実には、保護者と担任が対立することで指導が困難になります。しかし解決のゴールは保護者の

納得ではなく、担任のサポートのもと、Aが変容することです。

Aの変容のためにも、保護者にAの行為について理解してもらいたいところです。しかしAの非を認めさせようとすればするほど、保護者の担任への反発が強くなることは明白です。

ここで知っておいてほしいのは、わが子を守ろうとする保護者の気持ちと戦っても勝ち目はないということです。

まず手がけることは、保護者と敵対しているというポジションを変えることです。ひよっとすると「自分はそうしたい」と考えているけれど、保護者がその気で

はないから」と思うかもしれませんが。しかしこの場合、事態を動かなくさせているのは、担任のほうの「自分は正しい」「自分は悪くない」という思いかもしれないのです。

正しさは一つとは限らず、立場の数だけ正しさがあります。保護者と手を取り合っていくためには、保護者の正しさを理解し、寄り添っていく必要があります。また、声を荒げた指導についても、きつと「それはあまりよくないことだが、仕方がなかった」と思っているのではないのでしょうか。

知らず知らずのうちに、「自分は悪くない」という構えが、担任にもできてくるかもしれません。こうなると事態は硬化します。まずは担任が柔軟になることです。



保護者に寄り添う

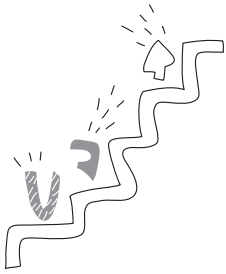
保護者と子どもとの心理的な距離が、以前よりも近くなっていると言われます。子どもが指導されると保護者も自分が指

導されたかのように感じ、反発するといった具合です。その際の保護者の心を想像してみましよう。そこには、怒りだけではなく悲しみもあるのではないのでしょうか。

わが子がいじめをしていたと聞くと、保護者にはどんな感情が生起するでしょう。驚き、悲しみ、不安、罪悪感、嫌悪、怒り……。これらは、保護者を頑なにさせます。

そんな保護者の心をやわらげるためには、その気持ちに共感することです。そして、それでもなお子どもを信頼し、期待しているという担任の思いを伝えることです。それによって、保護者は希望をもつことができます。

子どもに、よりよい人間関係を築いて



ほしい。失敗から学んでほしい。

これは担任の願いであると同時に、保護者の願いでもあるでしょう。両者の願いが重なれば手を取り合うことができま

す。
ここに至るためには、担任の「自分は正しい」「自分は悪くない」という思いをいったん手放す必要があります。なぜかと言うと、保護者の中には、何か困難に出会ったときに、自分を責めるタイプの人と他者を責めるタイプの人がいるからです。仮に保護者が「自分は悪くない」と強く思うタイプであれば、いつまでも平行線で、手を取り合うことはできないのです。

「あのときは、つい大きな声を出してしまい、申し訳なかったと思います。このことはA君にあらためて謝りたいと思っています。今冷静に考えると、友達同士の間では、ついついやりすぎてしまうというの、よく見られることです。でも、同じようなことが続くと、そういう子は次第に孤立していきます。A君をそうさせたくはありません。今でもA君の言動

は以前と変わっていません。私が大きな声を出したことを正当化しているわけはありませんが、それとは別に、このことはA君本人にわかってもらいたいと思っています。指導に協力していただけませんか」

そんな言葉で保護者の理解を得ることが必要です。

子どもと向き合う

昼休みに、

担任「A君。君に謝らないといけないことが二つあるんだよね。家の人の了解もとってあるから、放課後二〇分ほど残ってもらえるかい」

放課後、

担任「時間をつくってくれてありがとうね。謝りたいことの二つは何か、わかるかな？」

A「ぼくにBとのことで怒鳴ったことですよね。あと一つはわかりません」

担任「一つ目はそれだね。きつと君は悪

気もなく言っていたんだと思うんだけど、いきなり大きな声を出す必要はなかったと思ってるよ。あのときは、どんな気持ちだった？」

A「とてもシヨックでした。怒鳴られるようなことをしているつもりはまったくなかったから」

担任「そうだよ。先生もあれは失敗をしたらと思っています。大変申し訳ありませんでした」

A「あ、はい」

担任「謝ることは二つなんだけど、もう一つは何か思いついたかな？」

A「いえ」

担任「反対に、先生に謝りたいこととかあるかな？」

A「謝るっていうか、あの後、反抗的な態度だったかなと思います」

担任「そうしているときって、楽しかったかな？」

A「いえ」

担任「そうだよ。先生のもう一つの謝りたいことは、前からB君が嫌な思いをしているということを先生は感じて

いたんだけど、それをA君に伝えていなかったことだよ」

A「そうですか」

担任「もし、B君が嫌な思いをしていることを知っていたら、A君はやめていたと思う？ それとも、やっていたと思う？」

A「わかっていても、やっていたかもしれません」

担任「そうなんだね。わかっていてもついやってしまうことってあるよね」

A「はい」

担任「今のA君から、やらないA君になるには何が必要かな？」

A「思いやりとかかなあ」

担任「じゃあ、今のA君からさらに思いやりのある進化系のA君になるために、先生も協力するからね。君はいつも周りを楽しませてサービスピ精神が旺盛なんだから、思いやりが増えると、もっと多くの人に好かれるよ。きつと、そうなるよ。小学校を卒業するまで君を見守るからね」

A「ありがとうございます」